

大阪教育サークルはやし 宮本哲

「自分を見つめ直す」

読書の秋にちなんで、「おすすめの本の紹介」という原稿依頼を頂きました。原稿依頼を頂くことで、今までにどんな本を読んできたのだろうか、そして本からどんなことを学んできたのだろうかと改めて考え直すきっかけとなりました。

現在読んでいる本のジャンルは、教育雑誌、教育関係の本、伝記、詩集、雑誌、ビジネス書など様々なジャンルの本を読んでいます。

その中で何度も読み返す本があります。なんで何度も読み返すのだろうか？と考えてみました。

一度しか読まない本は多数あります。数回読み返す本も多数あります。しかし何度も何度も読み返す本は少数しかありません。私にとってその小数の本は、積極的に運命

を切り開いてくれる原動力になっていると思います。何度、読んでもいいなあと感じます。お話の先は分かっているのに同じところで何度も読んで涙を流します。その本の言葉一つ一つに力があり、私にも力を与えてくれます。

今紹介する本

「心に響く小さな5つの物語」

致知出版社

この中には、短編の5つの物語が収められています。

第一話

〈夢を実現する〉

「ある小学六年生の作文がある。」

と言う書き出しから始まります。この作文を書いたのは、小学六年生の時のイチロー。

作文では、イチロー選手の夢について書かれています。そして夢を実現する上で大事なものは何かを語っています。

第一は、夢に対して、本気であること。  
第二は、夢に対して代償を進んで支払おうとする気持ちが強いこと。

第三は、お世話になった人に対して報いるという報恩の心をもっていること。

私のクラスの子たちも皆、大きな夢を持っていきます。その夢を実現するために学校から帰ったらすぐにサッカーや水泳、野球などの練習に行つて頑張っています。けれど、多くの子どもたちは自分だけが頑張っていると思つているように感じます。自分が頑張れるのには、周りの人の支えがあるということを感じてもらいたいと思つています。

第二話

〈喜怒哀楽の人間学〉

「少年は両親の愛情をいっぱいを受けて育てられた。殊に母親の溺愛は近所の物笑いの種になるほどだった。」

このような書き出しから始まります。両親にたくさん愛情を注がれ幸せいっぱい育てていく少年の様子が目に浮かびます。

しかしある時、急に母親が粗末な離れに籠りました。母親は結核を患っていました。

少年は、母親に会いたくて、離れに会いに行きますが、母親は今までの優しい母親ではありませんでした。少年を見ると、罵声を浴びせたり、コップ、お盆、手鏡などを少年に投げつけました。

少年の母親に対する感情が、愛情から憎悪に変わっていきました。

母親は、少年に結核をうつさないように何とか少年を遠ざけようとしてました。自分が嫌われることで少年を遠ざけようとしてました。母親の少年に対する、罵声、コップ、お盆、鏡など一つ一つが愛情なのです。こんな形でしか愛情表現ができない母親の心を思うと胸が痛みます。

そんな母親の気持ちは、少年には理解できませんでした。母親は、少年にとつて、ただの憎悪の対象でしかなくなりなりました。

本当はお互いが強い愛情でつながっているのに、その愛情がうまく結びつかない、何とも切ないお話です。

この物語を読んで、改めて母親の子どもに対する愛情の深さに気付かされました。教師という仕事は、愛情をたくさん注がれ

た子どもたちを共育する、大変難しくやらいのある職業だなと感じました。

この物語は、その後、母親が亡くなります。少年は少年院に入るぐらい悪くなつていきます。しかし……。

この続きは、実際にお読みください。

### 第3話

#### 〈人の心に光を灯す〉

### 第四話

#### 〈人生のテーマ〉

どちらの物語もとってもいいお話です。

### 第五話

#### 〈縁を生かす〉

私は、五つある物語の中で、このお話を一番多く読み返しています。何度も何度も読んでいます。授業でうまくいかなかった時、子どもがよくわからなくなった時、子どもをたくさん叱ってしまった時など、いろんなときに読み返しています。

サークルでも紹介したことがあります。

その時は、サークルメンバーに音読してもらいました。その方は、読んでいる時、何度も読みを止め、涙を流していました。聞いている私も涙を流しました。

さてこの物語は、

「その先生が五年生の担任になった時、一人、服装が不潔でだらしなく、どうしても好きになれない少年がいた。」  
という書き出しで始まります。

ある時、先生は、少年の一年生からの記録が目に残りました。そこには、

「朗らかで、友だちが好きで、人にも親切。勉強もよくでき、将来が楽しみ。」  
と書いてあった。二年生には、

「母親の病気で世話をしなければならず、時々遅刻する。」三年生には、  
「母親が死亡。希望を失い、悲しんでいる。」

四年生には、

「父は生きる意欲を失い、アルコール依存症になり、子どもに暴力をふるう」

これを読んだ先生は、少年が、深い悲しみ背負いながら、生きていることを知り、生身の人間として少年を見ることができるようになります。

この物語を読んだ時、クラスの子どもたち一人一人を生身の人間として見ているか考えさせられました。このお話の最後がまた感動します。ぜひ、読んでみてください。